

島根県古代文化センター研究論集 第30集
古代出雲と吉備の交流(抜刷)

第一部 弥生時代—青銅器・鉄器・土器の様相

弥生時代の鉄器流通からみた山陰と吉備

会下 和宏

2023年3月
島根県古代文化センター

弥生時代の鉄器流通からみた山陰と吉備

会下和宏

はじめに

本稿では、弥生時代の集落遺跡から出土した鉄器流通の状況を検討し、当時の山陰と吉備の社会に及ぼした影響について考察したい。前稿では、中国地域における時期ごとにみた鉄器の分布状況や出土点数などを整理し、日本海・瀬戸内海沿岸だけでなく、内陸山間部も含めた有機的な鉄器の流通網が形成されていたことを看取した(会下2019・2020)。本稿では、屋上屋を重ねることになるが、さらに九州北部および北陸も含めたよりマクロな視点から西日本の鉄器流通を俯瞰したうえで、改めて山陰と吉備の様相についてアプローチする。

1. 各地域集落遺跡の鉄器出土状況

ここでは、弥生時代の各地域・時期⁽¹⁾における集落遺跡出土鉄器点数の推移を定量的に概観したい。ここで対象とした鉄器は、器種が明確に特定でき、所属時期が註1の表2・3に示したそれぞれの時期の中に限定できるもののみとしている。所属時期が絞り込めないもの、さらに鉄片や鉄針などについては対象外とした。鉄器は、土器・石器と比較すると、埋没環境によっては腐食してしまい、残存しない場合が想定される。本稿では、こうしたバイアスを考慮しつつ、現時点で判明している鉄器出土資料をなるべく多く集成することによって実態に近づくことを目指した。

(1) 九州北部(筑前・唐津湾沿岸、図2)

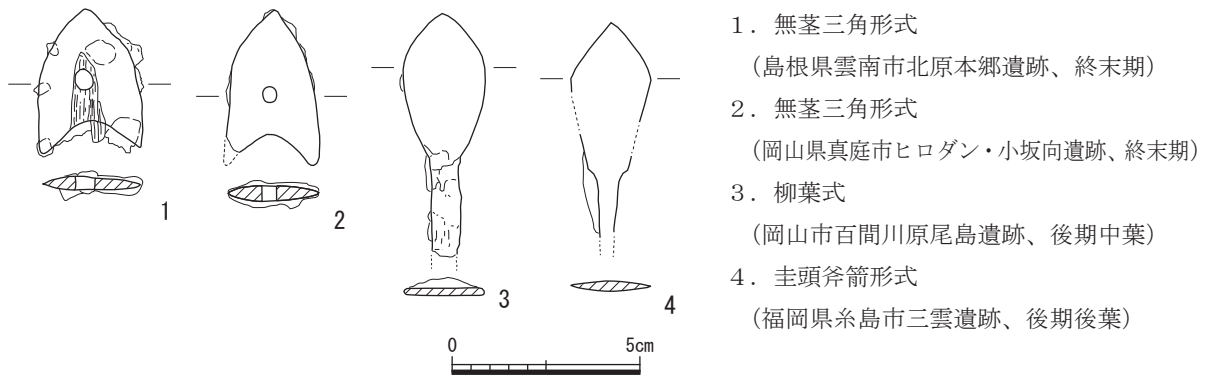
九州北部における鉄器の変遷については、すでに長家伸氏によって整理がなされている(長家2002)。すなわち、前期末葉に鑄造鉄斧の破損品を研磨製作した鉄斧・鉄鑿などの再加工品が出現し、中期初頭に到るまで大半を占めること、鉄斧では前期末葉に出現した袋状鉄斧が「後期後半」に主体を占めるようになること、農具では鋤・鋤先が「中期後半～末」に、鎌が「中期中頃」に出現し、いずれも「後期後半」以降に出土例が急増すること、「後期後半」以降、出土鉄器の増加や構成の多様化が顕著になることなどが指摘されている。

図2は、筑前および唐津湾沿岸地域における時期別の集落遺跡出土鉄器点数の推移である。まず、前期末葉から中期初頭にまとまった出土がみられたあと、点数が急増するのは中期後葉である。その後、後期後葉に到ると、再び飛躍的に出土点数が増加し、終末期も増加傾向が継続するようである。こうした増減を概括的に捉えて、以下では、前期末葉から中期初頭における鉄器出土点数増加を第1波、中期後葉におけるそれを第2波、後期後葉から終末期におけるそれを第3波と仮称しておきたい⁽²⁾。各時期の存続年数が一定である保証はないが、第3波の急増の状況は劇的であり、明らかにこの時期において鉄器流通量が増大したことが想定できよう。

器種組成の特徴としては、後期後葉および終末期において、鋤先・鎌・摘鎌などの農耕具が本州地域と比較して高い割合を占めている点があげられる。弥生後期における九州北部の各集落では、鉄刃農具をはじめとした各種鉄製農具が、一般的な集落においてもある程度保有されていたと評価されており(野島2010)、本稿でもこの推定を追認する。また、鉄斧の様相をみると、中期前葉では、板状鉄斧が袋状鉄斧に比べて多数を占めるが、中期後葉以降は袋状鉄斧が増加し、後期中葉以降では、ほぼ袋状鉄斧で占められるようになる。鉄鋸は、中期後葉までは無茎三角形鋸および柳葉式が共存しているが、新たに圭頭斧箭形式⁽³⁾(図1-4)などが後期前葉頃以降に出現し、後期後葉頃以降に増加するなど、多様性が認められるようになる(表1)。

表1 鉄鏃形式の内訳（％は概数）

	筑前・ 唐津湾沿岸	山陰	北陸	備中南部 ・備前	備中北部 ・美作
無茎三角形式	60 (52%)	91 (83%)	8 (20%)	5 (7%)	19 (42%)
柳葉式	21 (18%)	14 (13%)	25 (61%)	60 (87%)	23 (51%)
有茎三角形式	0 (0%)	5 (5%)	4 (10%)	1 (1%)	1 (2%)
圭頭斧箭形式	29 (25%)	0 (0%)	3 (7%)	0 (0%)	1 (2%)
その他	5 (4%)	0 (0%)	1 (2%)	3 (4%)	1 (2%)
合計	115	110	51	69	45



- 1. 無茎三角形式
(島根県雲南市北原本郷遺跡、終末期)
- 2. 無茎三角形式
(岡山県真庭市ヒロダン・小坂向遺跡、終末期)
- 3. 柳葉式
(岡山市百間川原尾島遺跡、後期中葉)
- 4. 圭頭斧箭形式
(福岡県糸島市三雲遺跡、後期後葉)

図1 各形式の鉄鏃 (1/2)

(2) 山陰 (図3～7)

すでに前稿(会下2019)で山陰地域の鉄器化の状況について概観しており、本稿においても大きな変更はないが、改めて山陰全体の様相をみておきたい。図3は、山陰全域における時期別の集落遺跡出土鉄器点数の推移である。中期後葉と後期後葉に鉄器急増がみられ、九州北部の様相と同調している。すなわち、中期後葉の急増が九州北部で認識した第2波、後期後葉のそれが第3波に相当し、第2波よりも第3波の急増ぶりが大きい点も九州北部と同様である。また、鉄斧の様相についても、中期後葉では、板状鉄斧が袋状鉄斧に比べて多数を占めるものの、後期以降は袋状鉄斧の比率が増加しており、九州北部と類似した傾向を示していよう。鉄鏃は、時期に関わりなく約83%が無茎三角形式(図1-1)である(表1)。

次に、山陰各地域の様相についても旧国別にみておきたい。石見では、全時期を通じて出土点数が少ないため、増減の傾向がつかみづらいが、終末期に到って点数が増加している(図4)。終末期では、島根県浜田市道休畑遺跡や島根県美郷町沖丈遺跡でのまとまった出土事例がある。

出雲では、宍道湖・中海周辺の丘陵上や神戸川・斐伊川河岸段丘上に立地する遺跡からの出土例が多く、出雲平野沖積地に立地する遺跡からの出土例は少ない。この要因として、当平野における遺構の残存状況や、遺跡が湧水の激しい地表下深くに存在するために、発掘調査環境の制約から遺構検出が比較的困難であるという事情が、ある程度反映されている可能性がある⁽⁴⁾。こうした様々なバイアスを考慮する必要があるが、現状では終末期に鉄器出土点数が増加するようである(図5)。

伯耆は、山陰の中でも圧倒的に出土点数が多く、中期後葉以降、大山山麓や日野川流域の丘陵・台地上に立地する遺跡からの出土がみられる。この地域は山陰の中でも竪穴住居跡などの検出事例が多く、こうした遺構の良好な残存状況が鉄器出土点数にもある程度反映されていると考えられる。出土点数の増減をみると、中期後葉および後期後葉に鉄器の急増が認められる(図6)。

因幡では、中期後葉と後期後葉の二時期の出土点数が多い(図7)。中期後葉は鳥取市青谷上寺地遺跡、後期後葉は鳥取平野の千代川河口部にある鳥取市秋里遺跡の事例によって占められる。なお、青谷上寺地遺跡では、所属時期が絞り込めなかったために本稿では除外した鉄器資料が多量に出土している(水村編2011など)。図7にこうした資料を含めれば、増減の動向も変化する可能性がある。また、図7グラ

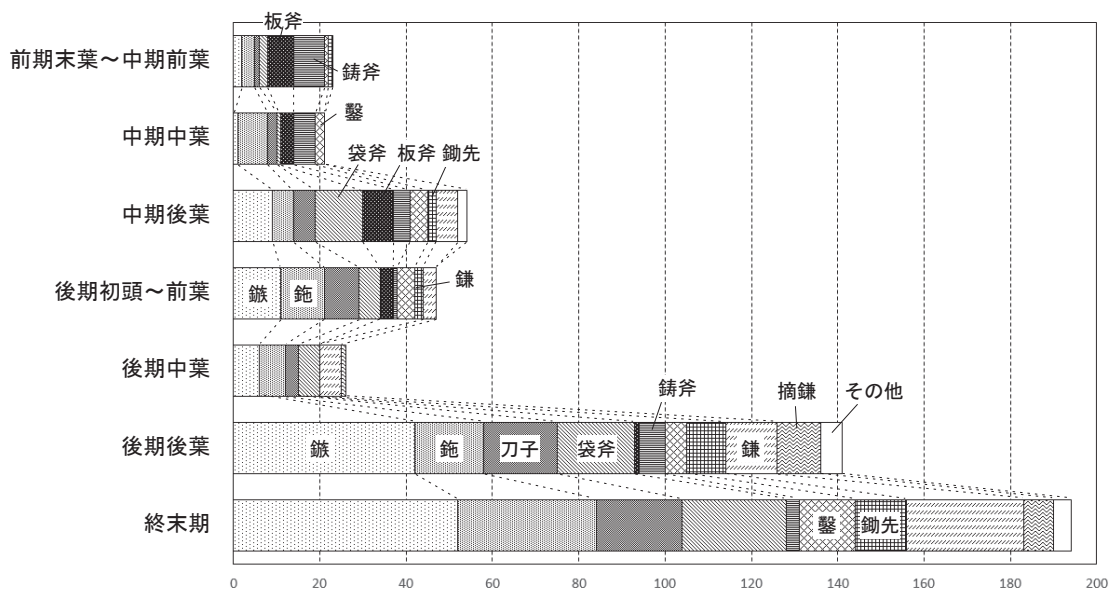


図2 弥生集落遺跡出土鉄器の点数 (筑前・唐津湾沿岸、横軸最大値 200 点)

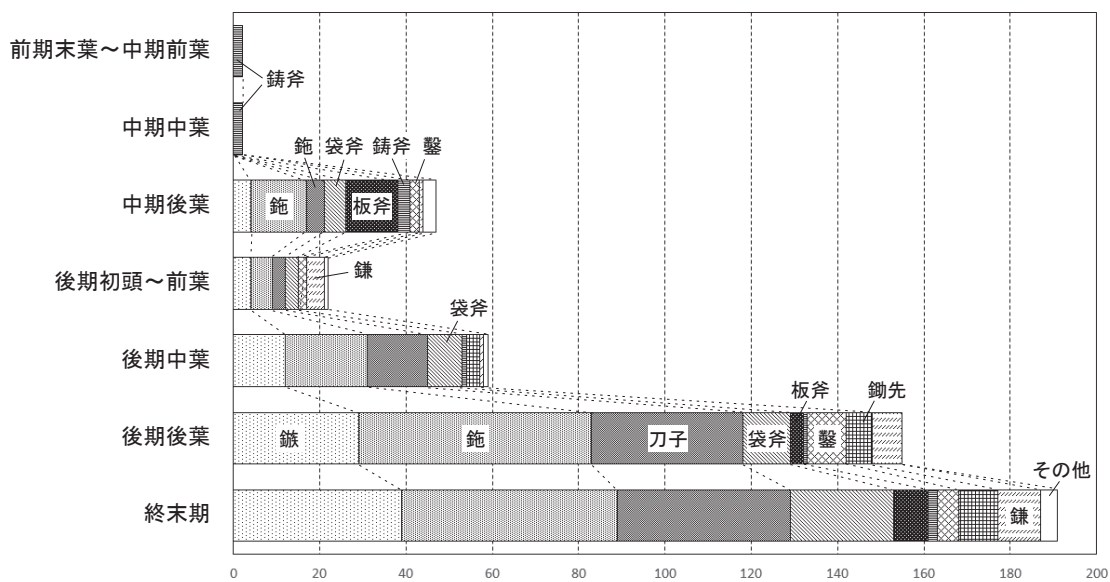


図3 弥生集落遺跡出土鉄器の点数 (山陰全域、横軸最大値 200 点)

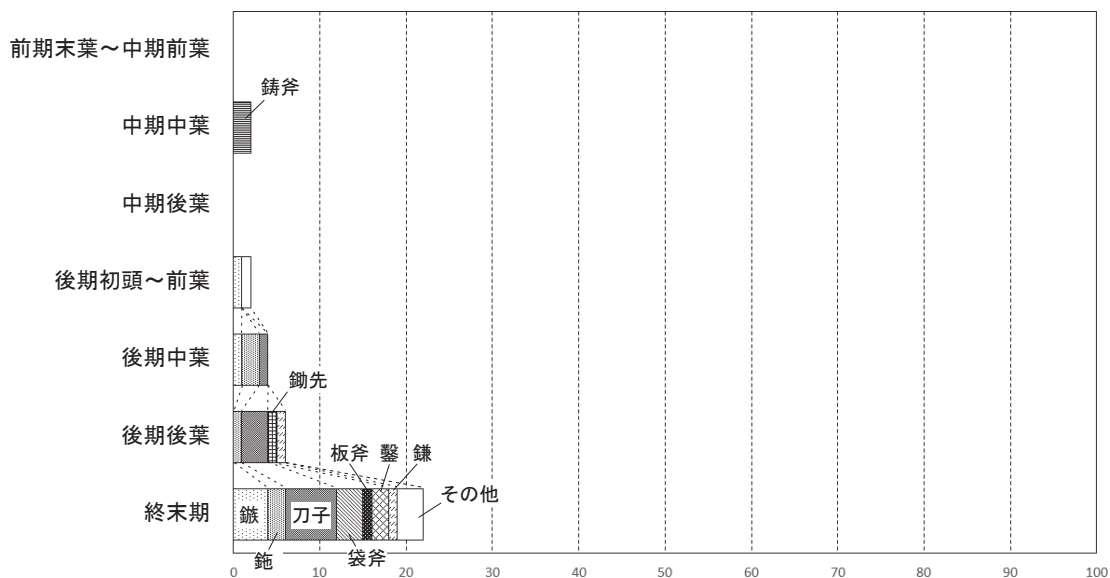


図4 弥生集落遺跡出土鉄器の点数 (石見、横軸最大値 100 点)

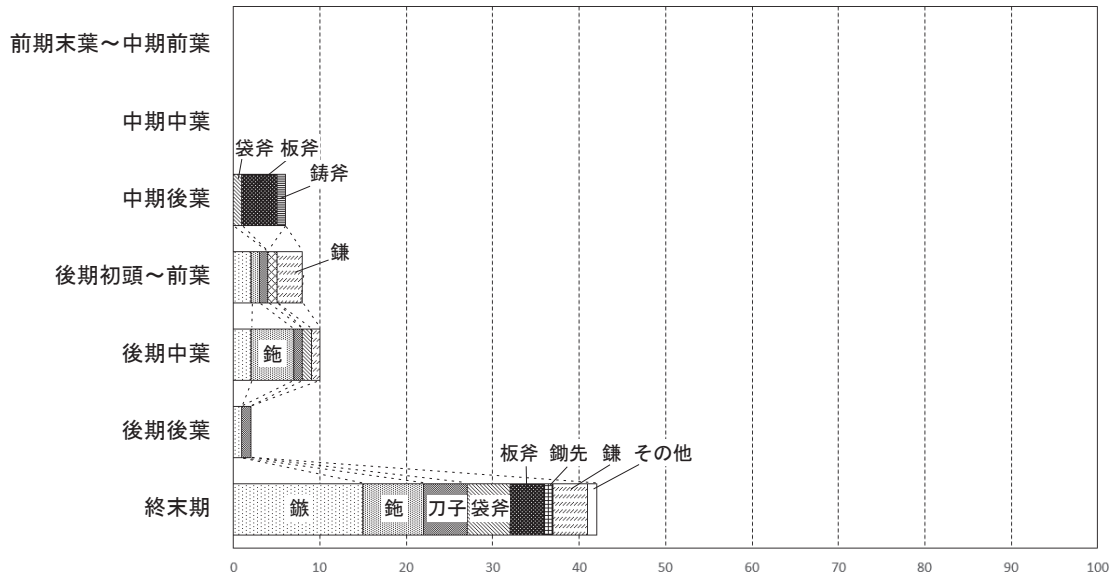


図5 弥生集落遺跡出土鉄器の点数（出雲、横軸最大値 100 点）

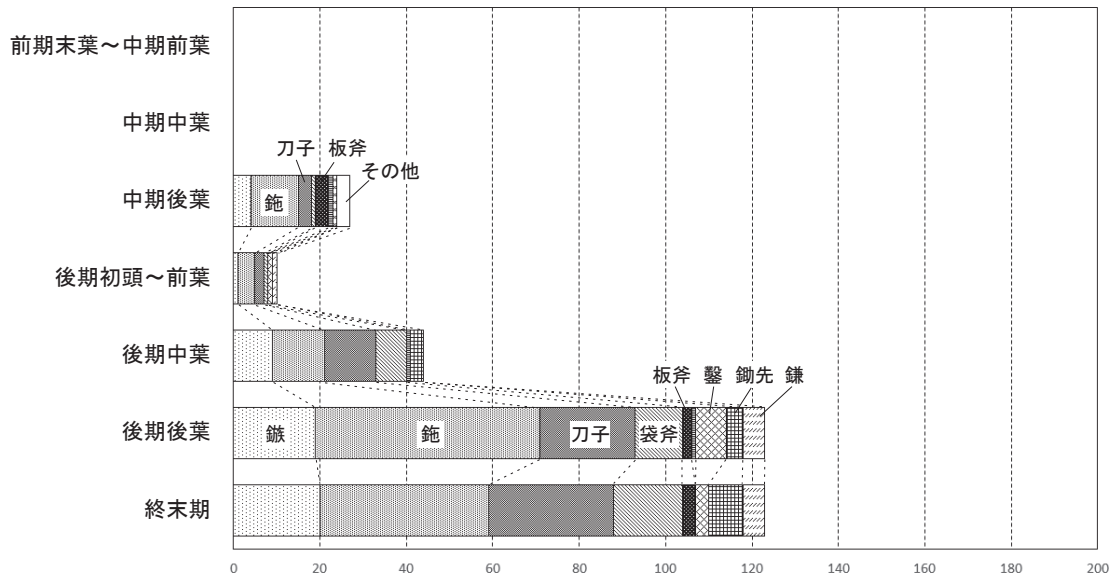


図6 弥生集落遺跡出土鉄器の点数（伯耆、横軸最大値 200 点）

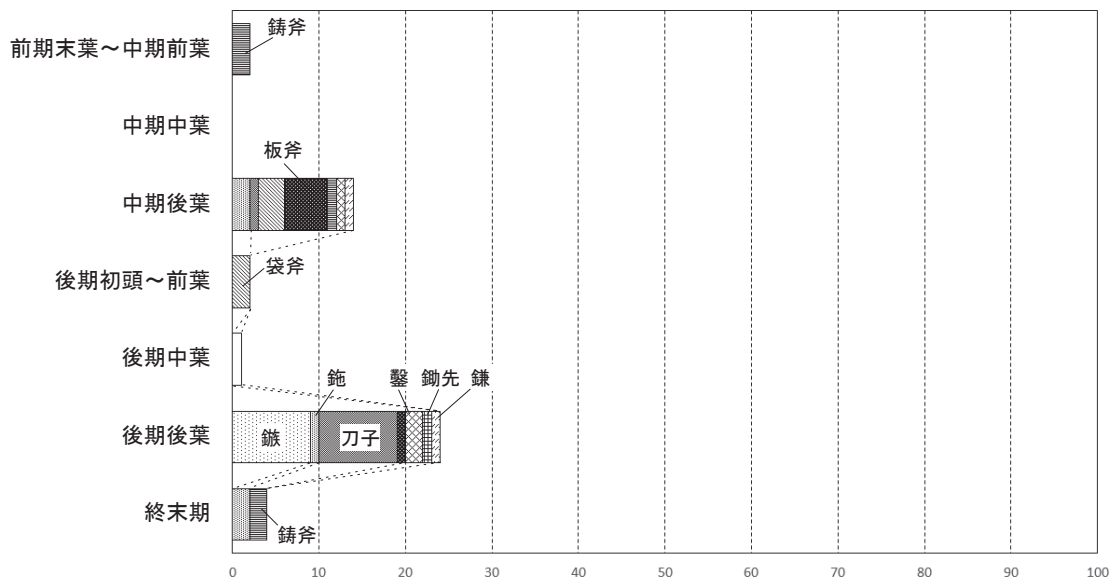


図7 弥生集落遺跡出土鉄器の点数（因幡、横軸最大値 100 点）

フには含まれていないが、湖山池の南東側に立地する後期中葉から終末期の鳥取市西桂見遺跡住居址からも鉄片などが出土している。

(3) 北陸（越前・加賀・能登・越中・越後、図8）

後期後葉に出土点数の急増が認められ、終末期にかけてさらに増加している。この時期の増加は、九州北部や山陰で認識した第3波と同調している。組成としては、鉄鏃および鉋・刀子で占められ、九州北部・山陰と比較すると鉄斧は僅かである。鉄鏃は、柳葉式を始めとした有茎式が80%を占めており、同じ日本海側でも無茎式が80%以上を占める山陰とは対照的である（表1）。

後期後葉から終末期にかけての増加は、九州北部および山陰で認められた第3波が北陸にも波及したものと推定できよう。後期後葉から終末期にかけての北陸では、福井市小羽山30号墓・同高柳2号墓・石川県白山市一塚21号墓・富山市富崎1・2号墓など、山陰で盛行する四隅突出型墳丘墓が造営されており、ここで看取した鉄器流通の第3波の時期と重なっている。北陸にこうした墓制が伝播する背景のひとつには、鉄器流通を代表とした日本海水運による地域間交流の活発化が想定されよう。

(4) 吉備南部（備中南部・備前、図9）

前稿（会下2020）で検討したように、中期後葉と後期後葉に急増が認められ、それぞれ九州北部で認められた第2波と第3波に相当すると考えられる。九州北部および山陰と同様に第3波における急増が顕著である。ただし、第2波と第3波の狭間の時期である後期初頭から中葉にかけては、それ程出土点数の減少が窺えない。後期から終末期では、鉄鏃と鉋が多数を占めており、九州北部・山陰と比較すると鉄斧は僅かである。鉄鏃は、約87%が柳葉式（図1-3）で、無茎式が80%以上を占める山陰とは対照的である（表1、池淵1998、野島1993など）。

(5) 備中北部・美作（図10）

中国山地内陸部の備中北部・美作では、後期初頭から前葉、および終末期に増加が認められるが、現状では九州北部・山陰・備中南部・備前で認められたような中期後葉の第2波とは同調していない。鉄鏃は、無茎三角形式が42%、柳葉式が51%となり（表1）、無茎三角形式が大半を占める山陰と柳葉式が大半を占める備中南部・備前の双方からの影響が窺える（会下2020）。身部に単孔を有する無茎三角形式鉄鏃（図1-2）も散見され、四十曲峠などをルートにした山陰からの影響が窺える（図11）。

(6) その他の地域（会下2020）

周防では、九州北部・山陰・吉備南部と同様に中期後葉に第2波、後期後葉に第3波が認められる。後期に鏃と鉋が多数を占める点は、吉備南部と類似する。安芸では、九州北部・山陰・周防・吉備南部で認められたような中期後葉の第2波、後期後葉から終末期の第3波とは同調しておらず、後期中葉に急増期がある。後期中葉の急増は、この時期における遺跡数や遺構数の増加が影響している可能性がある。

(7) 小結

以上を整理しておくとして、日本海側の九州北部・山陰、および瀬戸内海側の周防・吉備南部では、中期後葉の第2波、後期後葉から終末期の第3波と仮称した鉄器出土点数の急増を認めることができた。さらに北陸では、九州北部・山陰における後期後葉から終末期の第3波の波及が認められる。臨海部を中心にいくつかの地域をまたいで出土点数が同調して急増する現象は、発掘調査累計面積・調査精度や遺構残存状況、鉄器腐食といったバイアスを差し引いても、実際にこれらの地域で当該期における鉄器の流通量・消費量そのものの急増という実態があったと見なして良いと考えたい。また、この要因としては、主たる鉄・鉄器生産地と目される朝鮮半島における生産量・供給量が増大し、これが日本列島に流

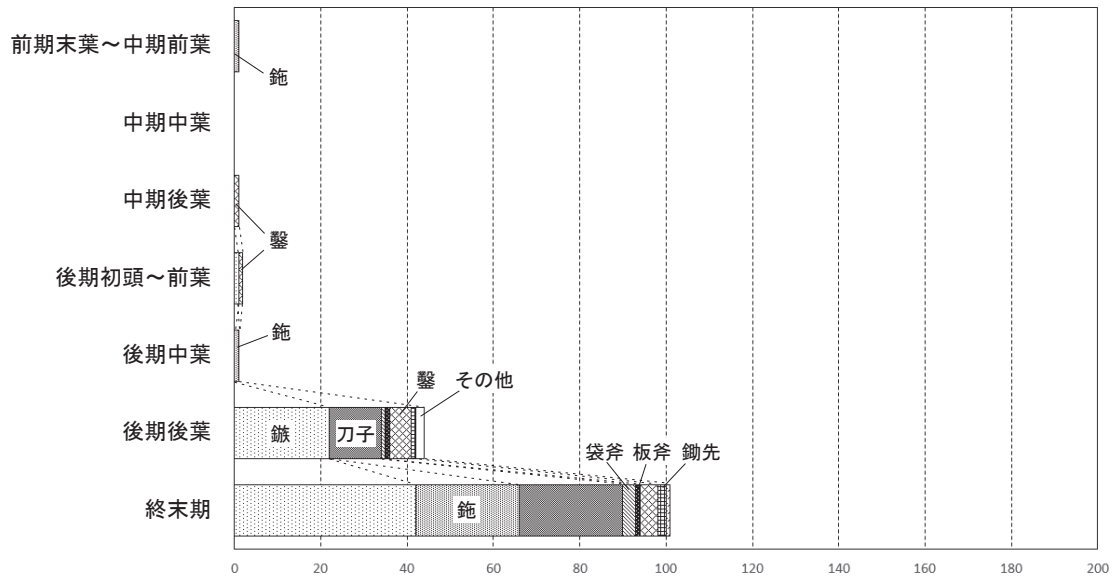


図8 弥生集落遺跡出土鉄器の点数（北陸、横軸最大値 200 点）

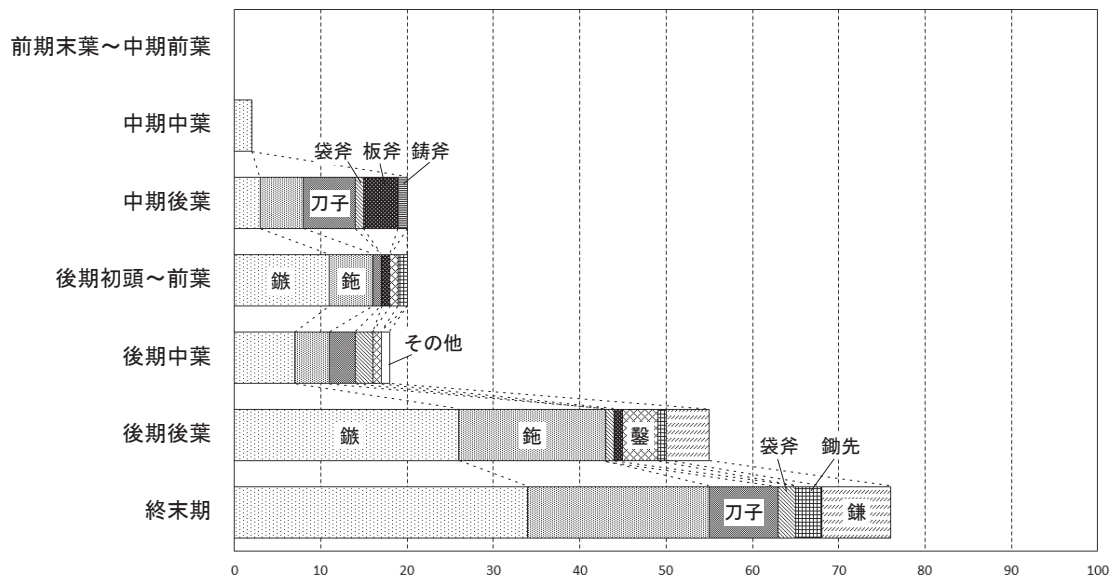


図9 弥生集落遺跡出土鉄器の点数（備中南部・備前、横軸最大値 100 点）

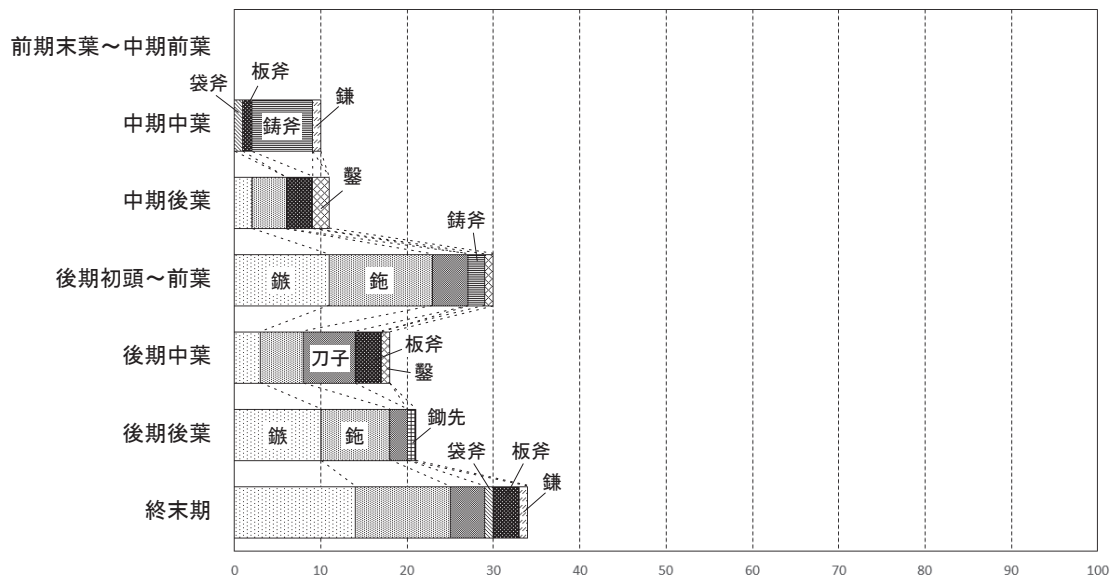


図10 弥生集落遺跡出土鉄器の点数（備中北部・美作、横軸最大値 100 点）

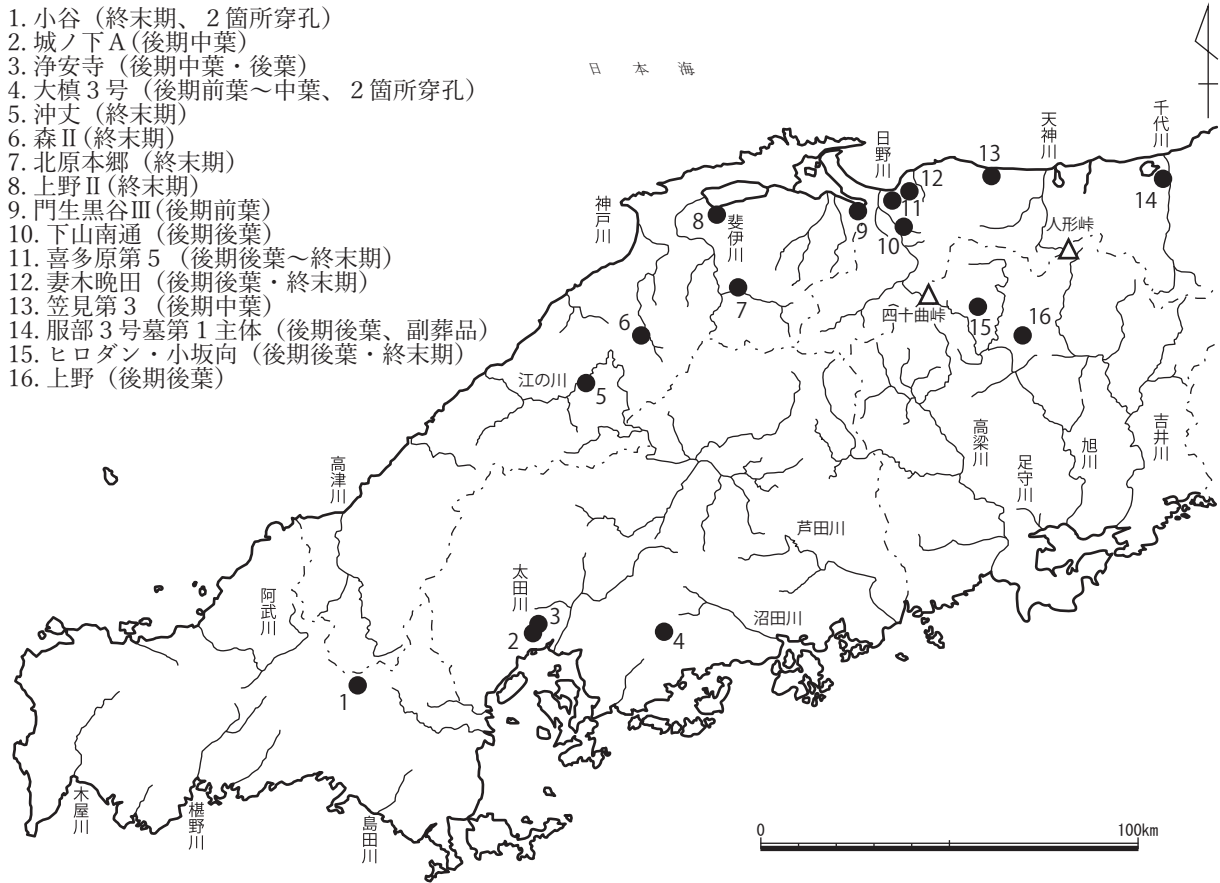


図11 有孔鉄鏃の分布

通することによって、西日本各地域における流通・消費量に影響を与えているものと推定する。このことについては、次節でみていきたい。

2. 日本列島・朝鮮半島における鉄器製作

(1) 日本列島における鉄器製作の様相

第1章の課題を考察するために、まず弥生時代における鉄器製作の様相について、長家伸氏の九州北部を中心とした整理(長家2002)を参考に改めてみておきたい。まず前期から中期初頭の第1段階では、鑄造鉄斧破片の研磨による板状鉄斧・鑿・鉋などへの整形・再利用が行われる。中期前半から後期初頭の第2段階では、鑄造鉄斧破片の再利用に加えて、板状鉄素材の鑿による切り落とし・整形を特徴とした「鍛冶」行為が開始される。この段階の鉄素材としては、「中期後半」頃、銑鉄の棒状・板状製品を脱炭処理した鑄鉄脱炭鋼が認められるようになる。漢系遺物である鑄鉄脱炭鋼は、楽浪郡の設置に伴って流入してきたものと推定されている。「後期前半」から終末期の第3段階では、引き続き第2段階からの鑿切りを主体とした鉄器製作が行われており、確認されている鍛冶遺跡も増加する。この時期の鉄素材には、銑鉄を攪拌脱炭して製鋼した炒鋼、低温還元の直接製鋼法による塊煉鉄が認められ、後者の塊煉鉄は、朝鮮半島で生産された可能性が高いとされている。

以上のうち、第2段階における鑄鉄脱炭鋼の素材が流入する時期は、第1章でみた鉄器流通の第2波の時期、第3段階の塊煉鉄の素材が流入する時期の後半は、鉄器流通の第3波の時期と重なる。すなわち、第2波は楽浪郡の設置による鑄鉄脱炭鋼製素材の流入、第3波は朝鮮半島における塊煉鉄製素材などの増産が遠因のひとつとして推定できよう。

(2) 朝鮮半島南部における鉄・鉄器生産

朝鮮半島南部における鉄・鉄器生産の概要については、金想民氏が以下の通り整理している(金想民2010)。1期は、鉄器生産が最初に流入した時期で、紀元前2世紀から紀元前後頃になる。輸入した鉄素材を用いて簡単な鍛造鉄器製作を行っていた段階で、釜山市菜城遺跡や泗川市勒島遺跡で製作址が確認されている。なお、朝鮮半島では、楽浪郡設置に伴って、それまでの鑄造鉄器を中心とした鉄器文化に替わって鍛造鉄器を中心とした新たな鉄器文化が流入・展開する(村上2021)。

2期は、紀元前後から3世紀頃で、板状の鍛冶素材と鍛冶製品を製作していた段階である。勒島遺跡や慶州市隍城洞遺跡ではこの時期の製作址が検出されており、弥生土器や楽浪土器が出土していることから、日本列島や楽浪郡との交流が想定されている。また、茶戸里64号墓では慶尚南道産とされる鉄鋳石が出土していることから、製錬がこの時期まで遡る可能性が示唆される(角田2006)。

なお、朝鮮半島南部の墳墓における鉄器副葬状況をみると、原三国時代後期頃にいたって大型木槨墓に鉄剣・鉄矛などの本格的な副葬がみられるようになる(高久2001)。また、当該期の鉄剣のなかには渦巻文を有する長剣のように、当地で製作されたと考えられる製品が多く存在する。このような大型鉄器の多量副葬は、まさにこの時期における鉄器生産技術の進展や鉄器生産量の増大を背景としたものだろう。続く3期は、4世紀代で、製錬や鑄造が行われていたと想定される段階である。

以上のうち、朝鮮半島南部で鍛造鉄器製作が行われていた1期は、第1章でみた鉄器流通の第2波の時期と重なる。製錬が開始された可能性があり、鉄器生産技術の進展や鉄器生産量の増大が想定される2期の後半頃は、第3波の時期と重なる。

3. 鉄器流通からみた山陰と吉備

第1章では、中期後葉における第2波、後期後葉から終末期における第3波とした鉄器流通量の増加を西日本の各地域において認めることができた。特に第3波の時期は、鉄器流通量の激増と言ってよく、明確な画期をなす。第2章で概観したようにこうした波動の主な淵源は、鉄器供給元である朝鮮半島における生産技術の進展や生産量の増大に求められそうである。

第2波および第3波のそれぞれの時期には、朝鮮半島南部から九州北部を經由して日本海側と瀬戸内海側の双方に水運を介した鉄器を中心とする広域流通がより活発化した。鉄器は、臨海部集落に留まらず、さらに河川ルートを介した水運・陸運によって内陸部にも浸透していった。こうした交通網を介した物流の活発化は、広域流通のハブとなる要衝地を生み出す。前稿で考察したように、ラグーン縁辺部や河川河口部に立地する港を擁した集落遺跡は、日本海や瀬戸内海などの水運と後背地となる内陸部との水運・陸運における結節点となり、物流が活発化すればより中心性が高まることにつながるだろう(会下2020)。

ところで、総社平野を流れる足守川流域における岡山県倉敷市上東遺跡からは、後期前葉に造営され終末期頃までに廃絶したと考えられる波止場状遺構が検出され、肩部や胴部に焼成後穿孔されたものを含む約640個体を越える完形土器、絵画土器・土製勾玉・卜骨・袋状鉄斧・貨泉などが出土している。貨泉や土器は、波止場状遺構盛土の基底部から出土しており、港の造営に伴って祭祀が行われたことを示している。その他の穿孔された土器などは、船の出航に際して水辺に投供されたものと推定されている(下澤2001)。上東遺跡の状況から窺える港の整備やメンテナンス、船の航行に関わる安全祈願などの祭祀行為⁽⁵⁾、積み荷の集積・積載・荷卸し作業などからは、それを統括・遂行した首長の存在が想定される。

そして、港が検出された上東遺跡の北西約1.9kmには長径約40mを測る楯築墳丘墓が存在しており、被葬者集団の権威・権力の大きさを物語る。墳丘墓は、鉄器の出土量が急増する、上記で第3波とした後期後葉の時期の所産であり、首長らによる鉄器流通の掌握・差配が首長権の伸長に作用し、こうした大形墳丘墓出現につながったことを想定させよう。なお、古代においては、楯築墳丘墓がある総社平野には高梁川の分流が蛇行し足守川と合流しており、こうした立地条件がこの地域の交通の要衝としての

重要度を高めていたようである(新納2022)。すなわち楯築墳丘墓の被葬者集団は、高梁川を介して、流域の内陸部との流通関係をも掌握していたことを想定させるのである。さらに、流通量の増大に伴って上東遺跡でみられた港などのインフラや水運の重要度が高まったことも首長権の肥大化に影響を及ぼしたと考えたい。

一方、山陰側では、日本海沿岸のラグーンである東郷池周辺の丘陵上にある鳥取県湯梨浜町宮内遺跡群や同南谷ヒジリ遺跡・南谷大山遺跡といった集落遺跡において、後期中葉から終末期にかけての鉄器が多数出土している。日本海と通じたラグーンである東郷池沿岸には、こうした鉄器がもたらされた港が存在していたと推定できよう。宮内遺跡群のうち、宮内第1遺跡で検出された後期中葉頃の1号墓からは長剣・大刀・ガラス製管玉など、後期後葉頃の長辺約23.5mを測る3号墓からは大刀などの希少な器物が副葬されていることから、これらは階層上位の墳墓と認定される。こうした事例も集落・地域における鉄器流通量の増大と階層上位墓の出現とが、ある程度関連性をもつことを示唆している。山陰の同様の事例として、中海南岸の丘陵斜面に立地し、終末期の鉄器がまとまって出土した集落遺跡である島根県安来市塩津山遺跡群と、同一丘陵上に立地する長辺約31～32mを測る四隅突出型墳丘墓である塩津山6・10号墓との関係もあげられる。

一方、出雲平野や斐伊川を望む丘陵上に立地する後期後葉から終末期頃における最大級の墳丘墓群である島根県出雲市西谷墳墓群については、上記したように出雲平野におけるこの時期の鉄器出土事例が比較的少ない。しかし当平野からは、九州北部など他地域の土器や瓦質土器・楽浪土器の出土が多くみられ、活発な広域交流が展開していたことを示唆している。出雲平野は、北側にある島根半島の山塊が日本海に突き出し、西側にあるラグーン「神門水海」と東側にある宍道湖・中海の間に挟まれた地形的環境を有しており、日本海の沿岸航海にとってはやはり要衝地であったといえる。伯耆や北陸における後期後葉から終末期の鉄器増加を視野に入れば、これら出雲以東の地域が西方からの物資を入手するうえで、この時期の出雲平野が流通の結節点として重要な位置を占めていたことが推測されるのである。以上のことから、西谷墳墓群造営の一背景についても広域流通の活発化と関連付けて考えておきたい。

結びにかえて

本稿では、主に西日本各地における鉄器の流通量の増減を捉えて、それが日本海沿岸の四隅突出型墳丘墓、瀬戸内海沿岸の楯築墳丘墓造営の背景のひとつになったことを述べた。多くの先学の考えを改めて追認したにすぎないが、裏打ちされるデータについて具体的な形で示すことができた。また、流通量増減の淵源は鉄素材・鉄器供給地の朝鮮半島にあったと考える。そして、西谷墳墓群や楯築墳丘墓といった大型墳丘墓の造営が単なる個別的な事象ではなく、広く東アジア的視野から俯瞰した際の鉄器流通圏周縁部において生じた現象であったと解釈しておきたい。また、こうした広域流通の活発化によって、モノだけでなく、大陸・朝鮮半島の先進的な情報も西日本各地に伝播したことが想像される。そうした刺激が、階層化社会の進展や大型墳丘墓造営という行為につながったと考えたい。そのような意味でも鉄器流通が果たした歴史的役割は、きわめて大きかったといえよう。

註

- (1) 資料集成にあたっては、川越編2000などを底本とした。各地域における出土鉄器の所属時期は、伴出する土器の時期から推定した。土器の年代的位置付けは、山陰以西は表2、山陰以东は表3に示した。表2は蒲原2013などを参考に、表3は野島・野々村2000などを参考にした。各地域間における型式同士の併行関係には細かなズレがあると推定されるが、論旨に影響がない限り捨象している。

表2 山陰以西のおおまかな併行関係

	肥前	筑前 筑後	長門	周防	安芸	備後	備中	備前	美作 (久田)	石見	出雲 隠岐	伯耆 因幡
前期末葉	VI	板付II 新段階	綾羅木 IIIb	3b	I-4	I-4	I-4	I-3		I-4	I-4	I-3
中期前葉	I	城ノ越	中期I		II	II	II-1~2	II-1~2	4~6	II-1	II-1	II-1~2
中期中葉	II~III	須玖I	中期II~III		III-1~2	III-1~2	III-1~3	III-1~2	7~9	III-1~2	III-1~2	III-1~3
中期後葉	IV 村徳永1	須玖II	中期IV		IV-1~2	IV-1~2	IV-1~4	IV-1~2	10~12	IV-1~2	IV-1~2	IV-1~3
後期初頭 ~前葉	村徳永2 村徳永3	高三瀨	後期I- 1~2	後期I- 1~2 V-2	V-1	V-1	V-1~2	V-1~2	13~14	V-1	V-1	V-1
後期中葉	千住1	下大隈 古段階	I b	V-3古	V-2~3	V-2	V-3	V-3	15	V-2	V-2	V-2
後期後葉	千住2 惣座0	下大隈 新段階	II	V-3新	V-4~5	V-3	V-4~5	V-4	16	V-3	V-3	V-3
終末期	惣座1~2	西新町	III a ~ b	V-4 吹越	II-3	IX-c X-a ~ b			17	V-4	V-4	VI-1 VI-2

表3 山陰以東のおおまかな併行関係

	伯耆 因幡	但馬	丹後 丹波	越前	加賀	能登	越中	越後
前期末葉	I-3							
中期前葉	II-1~2	II	II					
中期中葉	III-1~3	III	III-1~2					
中期後葉	IV-1~3	IV	IV		1 戸水B	4・5		
後期初頭 ~前葉	V-1	V-1	後期 I・II	V-1・2	2 猫橋	6	後期I・II	1
後期中葉	V-2	V-2	後期III	V-3	3-1・2 法仏	7-1・2	後期III	2古
後期後葉	V-3	V-3~4	後期IV		3-3・4 法仏	7-3・4	後期IV	2新
終末期	VI-1 VI-2	西谷3式 浅後谷南1式		V-4・5	4 月影	8	庄内 併行	3・4

肥前：中野1997・石田2008・蒲原1991・2003、筑前：田崎1985・1996、長門：伊東ほか1981・田畑2004・石井2000、周防：山本1993・田畑2004・石井2004、安芸：妹尾1992・若島2002、備後：伊藤1992・高橋護1983、備中：高畑1992・高橋護1983、備前：正岡1992・高橋護1983、美作：河合2005、石見・出雲・隠岐：松本1992a・b、伯耆・因幡：清水1992、但馬：谷本1992・高野2006、丹後：野島・野々村1999・2000・高野2006、越前：赤澤1996、加賀：楠1996、能登：栃木1995、越中：高橋浩2000・2002、越後：滝沢2000。この他、大久保2002・武末1987・田畑2012・田中2001・中川1996・松井1997・森本2010・柳田1987なども参照。

- (2) 「波」と表現する場合、厳密には鉄器出土点数の増加（寄せ波）と減少（引き波）がセットになっている必要があるが、後述するように、ここでは点数の急増という変動が各地域を越えて波及するような現象を例えてこのように表現しておきたい。
- (3) 鉄鎌の形式分類は、大村1983による。
- (4) 池淵俊一氏にご教示いただいた。
- (5) 野島永氏は、青谷上寺地遺跡から大量に出土している卜骨による古い対象の候補として、海上交通・交易に関わる事案をあげている（野島2012）。また同遺跡からは、多量の板材・杭による入念な護岸施設を伴った中期中葉以降の運河が検出されており、こうしたインフラの整備・メンテナンス（会下2022）においても作業を統括した首長の存在が想定されよう。

参考文献

赤澤徳明 1996「福井県地域」『YAY! (やいっ!) 弥生土器を語る会20回到達記念論文集』弥生土器を語る会 pp.317-324
 池淵俊一 1998「山陰における弥生時代鉄器の様相」『門生黒谷I遺跡・門生黒谷II遺跡・門生黒谷III遺跡 一般国道9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書14』島根県教育委員会ほか pp.285-294
 石井龍彦 2000「山口県西部の弥生時代後期後半～古墳時代初頭の土器について」『陶墳』第13号 山口県埋蔵文化財センター pp.23-33

- 石井龍彦 2004「山口県東部(周防)の弥生時代後期の土器について」『陶墳』第17号 山口県埋蔵文化財センター pp.29-44
- 石田智子 2008「佐賀平野東部地域における弥生時代中期の土器様相」『吉野ヶ里遺跡』佐賀県文化財調査報告書第177集 pp.10-17
- 伊東照雄ほか 1981『綾羅木郷遺跡Ⅰ』下関市教育委員会
- 伊藤 実 1992「備後地域」『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』木耳社 pp.155-238
- 会下和宏 2019「弥生時代の山陰地域における鉄器普及の様相」『山陰研究』第12号 pp.1-27
- 会下和宏 2020「弥生時代の中国地域における鉄器普及の様相」『山陰研究』第13号 pp.43-68
- 会下和宏 2022「山陰地域における標高0m前後の遺跡の様相」『博古研究』第62号 pp.19-32
- 大久保徹也 2002「中国・四国地方の土器」『考古資料大観 弥生・古墳時代の土器Ⅱ』小学館 pp.107-168
- 大村 直 1983「弥生時代における鉄鍬の変遷とその評価」『考古学研究』第30巻第3号 pp.71-90
- 角田徳幸 2006「韓国における製鉄遺跡研究の現状と課題」『古代文化研究』第14号 pp.51-80
- 蒲原宏行 1991「古墳時代初頭前後の土器編年－佐賀平野の場合－」『佐賀県立博物館・美術館調査研究書』第16集 pp.3-42
- 蒲原宏行 2003「佐賀平野における弥生後期の土器編年」『佐賀県立博物館・美術館調査研究書』第27集 pp.3-28
- 蒲原宏行 2013「西日本における弥生土器諸様式の併行関係」『弥生時代政治社会構造論』雄山閣 pp.85-100
- 河合 忍 2005「弥生時代」『夏栗遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告194 岡山県教育委員会 pp.669-676
- 川越哲志編 2000『弥生時代鉄器総覧(東アジア出土鉄器地名表Ⅱ)』広島大学文学部考古学研究室
- 金 想民 2010「韓半島における鉄生産研究の動向」『季刊考古学』第113号 pp.70-74
- 楠 正勝 1996「弥生時代中期後葉から古墳時代前期前半の土器」『西念・南新保遺跡』Ⅳ 金沢市教育委員会 pp.391-428
- 清水真一 1992「因幡・伯耆地域」『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』木耳社 pp.355-412
- 下澤公明 2001「祭祀について」『下庄遺跡・上東遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告157 岡山県教育委員会 pp.336-337
- 妹尾周三 1992「安芸地域」『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』木耳社 pp.239-315
- 高久健二 2001「三韓の墳墓」『東アジアと日本の考古学Ⅰ』同成社 pp.33-62
- 高野陽子 2006「丹後地域－擬凹線文系土器の様式と変遷－」『古式土師器の年代学』大阪府文化財センター pp.225-242
- 高橋浩二 2000「古墳出現期における越中の土器様相」『庄内式土器研究』XXⅡ pp.21-41
- 高橋浩二 2002「北近畿系統の土器と山陰系統の土器－越中弥生後期・終末期における日本海沿岸交流の諸段階－」『富山大学人文学部紀要』37 pp.59-69
- 高橋 護 1983「山陽」『弥生土器Ⅰ』ニュー・サイエンス社 pp.135-174
- 高畑知功 1992「備中地域」『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』木耳社 pp.79-153
- 滝沢規朗 2000「新潟県における弥生後期の土器編年」『東日本弥生時代後期の土器編年』第1分冊 東日本埋蔵文化財研究会福島県実行委員会 pp.244-249
- 武末純一 1987「須玖式土器」『弥生文化の研究』第4巻 雄山閣 pp.17-33
- 田崎博之 1985「須玖式土器の再検討」『史淵』122 pp.167-202
- 田崎博之 1996「北部九州－筑前」『弥生後期の瀬戸内海 古代学協会四国支部第10回松山大会資料』古代学協会四国支部 pp.27-34
- 田中義昭 2001「沖丈遺跡出土の弥生土器」『沖丈遺跡』邑智町教育委員会 pp.336-375
- 谷本 進 1992「但馬地域」『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』木耳社 pp.319-354
- 田畑直彦 2004「周防・長門における弥生時代中期の土器と併行関係」『弥生中期土器の併行関係』第53回埋蔵文化財研究集会発表要旨集 pp.51-74
- 田畑直彦 2012「周防西部・東部における弥生時代後期から古墳時代初頭の土器編年」『山口大学埋蔵文化財資料館年報』6 山口大学埋蔵文化財資料館 pp.263-268
- 栃木英道 1995「考察」『谷内・杉谷遺跡群』石川県立埋蔵文化財センター pp.519-551
- 長家 伸 2002「弥生時代の鍛冶技術について」『細形銅剣文化の諸問題』九州考古学会・嶺南考古学会 pp.99-115
- 中川 寧 1996「山陰の後期弥生土器における編年と地域間関係」『鳥根考古学会誌』第13集 pp.1-25
- 中野 充 1997「佐賀平野における弥生文化成立期の土器編年」『立命館大学考古学論集Ⅰ』立命館大学考古学論集刊行会 pp.65-78
- 新納 泉 2022「弥生墳丘墓と巨大古墳」『シリーズ地域の古代日本 出雲・吉備・伊予』角川書店 pp.91-121
- 野島 永 1993「弥生時代鉄器の地域性－鉄鍬・鉋を中心として」『考古論集－潮見浩先生退官記念論集－』潮見浩先生退官記念事

- 業会 pp.433-454
- 野島 永 2010「弥生時代における鉄器保有の様相－九州・中国地方の集落遺跡を中心として－」『京都府埋蔵文化財論集』第6集 京都府埋蔵文化財調査研究センター pp.41-54
- 野島 永 2012「弥生時代における鉄器文化と日本海沿岸域の社会」『海を渡った鏡と鉄 青谷上寺地遺跡フォーラム2012』鳥取県埋蔵文化財センター pp.61-71
- 野島 永・野々口陽子 1999「近畿地方北部における古墳成立期の墳墓(1)」『京都府埋蔵文化財情報』第74号 京都府埋蔵文化財調査センター pp.19-32
- 野島 永・野々口陽子 2000「近畿地方北部における古墳成立期の墳墓(2)」『京都府埋蔵文化財情報』第76号 京都府埋蔵文化財調査センター pp.19-34
- 正岡陸夫 1992「備前地域」『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』木耳社 pp.3-78
- 松井 潔 1997「東の土器、南の土器」『古代吉備』第19集 pp.40-67
- 松本岩雄 1992a「出雲・隠岐地域」『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』木耳社 pp.413-482
- 松本岩雄 1992b「石見地域」『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』木耳社 pp.483-519
- 水村直人編 2011『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告6 金属器』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告39 鳥取県埋蔵文化財センター
- 森本幹彦 2010「小羽山墳墓群出土弥生土器の編年と併行関係」『小羽山墳墓群の研究 研究編』福井市立郷土歴史博物館 pp.149-199
- 柳田康雄 1987「高三瀨式と西新町式土器」『弥生文化の研究』第4巻 雄山閣 pp.34-44
- 山本一郎 1993「山口県東部(周防)弥生前期土器編年」『古文化談叢』第30巻(上) pp.265-283
- 若島一則 2002「広島湾沿岸における弥生時代後期土器等に関する一考察」『研究連絡誌』I 広島市文化財団 pp.30-53

遺跡文献

- 【筑前】赤井手**：丸山康晴編 1980『赤井手遺跡』春日市文化財調査報告書第6集 春日市教育委員会／**穴江塚田**：井上裕弘編 1984『穴江・塚田遺跡』嘉穂町文化財調査報告書第4集 嘉穂町教育委員会／**有田**：井沢洋一編 1985『有田・小田部 第6集』福岡市埋蔵文化財調査報告書第113集 福岡市教育委員会、山崎龍雄編 1993『有田・小田部第18集』福岡市埋蔵文化財調査報告書第340集 福岡市教育委員会／**安德台**：茂和敏 2011『安德台遺跡群II』那珂川町文化財調査報告書第79集 那珂川町教育委員会／**安德・道善・片縄地区**：佐々木隆彦編 1979『安德・道善・片縄地区区画整理事業地内発掘調査概報』那珂川町教育委員会／**飯倉D**：中村浩・池田榮史編 1995『飯倉D遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第440集 福岡市教育委員会／**飯倉F**：宮井善朗編 1994『飯倉F遺跡1』福岡市埋蔵文化財調査報告書第379集 福岡市教育委員会／**井尻B**：吉留秀敏ほか 1988『井尻B遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第175集 福岡市教育委員会、吉井善朗編 1997『井尻B遺跡5』福岡市埋蔵文化財調査報告書第529集 福岡市教育委員会、横山邦継 2007『井尻B遺跡15』福岡市埋蔵文化財調査報告書第918集 福岡市教育委員会／**板付**：山崎純男編 1998『板付周辺遺跡調査報告書第19集』福岡市埋蔵文化財調査報告書第567集 福岡市教育委員会／**井原塚廻**：林覚編 1992『井原塚廻遺跡』前原町文化財調査報告書第38集 前原町教育委員会／**今宿五郎江**：榎本義嗣 2013『今宿五郎江14』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1182集 福岡市教育委員会／**浦の原**：石井美美子編 1990『浦の原遺跡I』夜須町文化財調査報告書第18集 夜須町教育委員会／**以来尺**：秦憲二編 1997『以来尺遺跡I』一般国道3号筑紫野バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第4集 福岡県教育委員会、齋部麻矢編 1998『以来尺遺跡II』一般国道3号筑紫野バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第6集 福岡県教育委員会、杉原敏之編 1999『以来尺遺跡III』一般国道3号筑紫野バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第7集 福岡県教育委員会／**岩本**：濱石哲也・榎本義嗣編 1993『入部IV』福岡市埋蔵文化財調査報告書第343集 福岡市教育委員会／**上の原**：井上裕弘編 1990『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告18』福岡県教育委員会、小田和利編 1993『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告27』福岡県教育委員会、小田和利・高橋章編 1995『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告33』福岡県教育委員会／**大谷**：井澤洋一編 1978『席田遺跡群調査概報II』福岡市埋蔵文化財調査報告書第46集 福岡市教育委員会、大庭康時・力武卓治編 1990『席田遺跡群VI』福岡市埋蔵文化財調査報告書第218集 福岡市教育委員会／**大塚**：森本幹彦 2011『大塚遺跡4』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1111集 福岡市教育委員会、木下博文 2013『大塚遺跡6』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1185集 福岡市教育委員会／**大南B**：井上義也 2004『大南遺跡B地点』春日市文化財調査報告書第38集 春日市教育委員会／**小原**：児

玉真一編 1977『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 X I』福岡県教育委員会／**小隈松山**：小田和利編 1987『小隈出口・小隈松山遺跡』甘木市文化財調査報告書第18集 甘木市教育委員会／**小笹**：飛高憲雄・二宮忠司 1975『福岡市小笹遺跡第2次発掘調査報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書第34集 福岡市教育委員会／**小田道**：副島邦弘編 1981『小田道遺跡』甘木市文化財調査報告書第8集 甘木市教育委員会／**貝元**：中間研志編 1998『貝元遺跡 I』福岡県教育委員会、中間研志編 1999『貝元遺跡 II』福岡県教育委員会／**勝浦坂口**：安武千里編 1998『勝浦北部丘陵遺跡群』津屋崎町文化財調査報告書第13集 津屋崎町教育委員会／**金山**：井上裕弘編 1981『金山遺跡』夜須町文化財調査報告書第4集 夜須町教育委員会／**蒲田部木原**：大庭泰時 1996『蒲田部木原3次』福岡市埋蔵文化財調査報告書第446集 福岡市教育委員会／**蒲田水ヶ元**：折原學編 1996『蒲田・水ヶ元遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第491集 福岡市教育委員会ほか／**上々浦**：佐々木隆彦編 1982『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書1』福岡県教育委員会／**上籬子**：前原町教育委員会 1980『上籬子遺跡』前原町文化財調査報告書第3集／**上椎**：井上裕弘 1982『上椎遺跡』嘉穂町文化財調査報告書第3集 嘉穂町教育委員会／**仮塚南**：水ノ江和同 1995『仮塚南遺跡』一般国道3号線筑紫野バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第3集 福岡県教育委員会／**木下**：飛野博文編 1986『木下遺跡』筑穂町文化財調査報告書第1集 筑穂町教育委員会／**蔵持古屋敷**：瓜生秀文編 1993『蔵持古屋敷遺跡 高祖遺跡群 II』前原市文化財調査報告書第46集 前原市教育委員会／**剣塚**：中間研志編 1978『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書 XX IV』下 福岡県教育委員会／**久保長崎**：松岡史編 1973『福岡バイパス関係埋蔵文化財調査報告』福岡県教育委員会／**黒ヶ畑**：宇野慎敏編 1982『黒ヶ畑遺跡』北九州市埋蔵文化財調査報告書第18集 北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室／**光照寺**：中村利至久編 1999『光照寺遺跡2』北九州市文化財調査報告書234集 北九州市教育文化事業団／**合の原**：佐々木隆彦編 1986『一般国道3号線筑紫野バイパス関係埋蔵文化財調査報告1 合の原遺跡』福岡県教育委員会／**古大間池**：佐々木隆彦編 1977『古大間池遺跡』糟谷町教育委員会／**御陵**：井上義也 2010『御陵遺跡2 2次調査』春日市文化財調査報告書第56集 春日市教育委員会／**神松寺**：山崎純男編 1978『神松寺遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第45集 福岡市教育委員会／**治郎ノ上**：中間研志・児玉真一編 1994『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告32』福岡県教育委員会／**座禅寺**：中間研志・児玉真一編 1994『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告32』福岡県教育委員会／**四箇船石**：吉留秀敏編 1995『四箇船石 I』福岡市埋蔵文化財調査報告書第422集 福岡市教育委員会／**須玖岡本**：平田定幸ほか 2011『須玖岡本遺跡4』春日市文化財調査報告書第61集 春日市教育委員会／**須玖唐梨**：平田定幸・中村昇平編 1988『須玖唐梨遺跡』春日市文化財調査報告書第19集 春日市教育委員会／**須玖黒田**：井上義也 2013『須玖黒田遺跡』春日市文化財調査報告書第70集 春日市教育委員会／**須玖坂本 B**：井上義也ほか 2020『須玖坂本 B 遺跡 1・4次調査』春日市文化財調査報告書第82集 春日市教育委員会／**須玖盤石**：平田定幸 2001『須玖盤石遺跡』春日市文化財調査報告書第29集 春日市教育委員会／**スダレ**：橋口達也編 1976『スダレ遺跡』穂波町文化財調査報告書第1集 嘉穂町教育委員会、浜田信也編 1983『スダレ遺跡』『八木山バイパス関係埋蔵文化財調査報告』福岡県教育委員会 pp.17-80／**駿河 A**：井上義也ほか 2015『駿河 A 遺跡』春日市文化財調査報告書第74集 春日市教育委員会／**石尺**：山崎悠郁子 2021『石尺遺跡 7次調査』春日市文化財調査報告書第87集 春日市教育委員会／**高原**：木下修・伊崎俊秋編 1994『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告31』福岡県教育委員会／**田島 B**：力武卓治 2010『田島 B 1』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1078集 福岡市教育委員会／**タラ**：嘉穂町教育委員会 1986『嘉穂地区遺跡群 III』嘉穂町文化財調査報告書第6集／**立岩焼ノ正**：浜田信也 1983『焼ノ正遺跡』飯塚市文化財調査報告書第7集 飯塚市教育委員会／**辻田**：小池史哲編 1979『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告第12集』福岡県教育委員会／**唐原**：小林義彦編 1989『唐原遺跡 II 集落址編』福岡市埋蔵文化財調査報告書第207集 福岡市教育委員会／**塔ノ本**：佐藤正義編 1999『塔ノ本遺跡』夜須町文化財調査報告書第42集 夜須町教育委員会／**頓田高見**：吉武孝礼編 1997『頓田高見遺跡 I』甘木市文化財調査報告書第40集 甘木市教育委員会／**那珂**：杉山富雄・小畑弘己編 1990『那珂2』福岡市埋蔵文化財調査報告書第222集 福岡市教育委員会、荒牧宏行 1994『那珂遺跡9』福岡市埋蔵文化財調査報告書第364集 福岡市教育委員会、菅波正人編 1994『那珂10』福岡市埋蔵文化財調査報告書第365集 福岡市教育委員会、菅波正人編 1995『中南部4』福岡市埋蔵文化財調査報告書第409集 福岡市教育委員会、下村智編 1997『那珂18』福岡市埋蔵文化財調査報告書第518集 福岡市教育委員会、木下博文 2018『那珂77』福岡市埋蔵文化財調査報告書1336 福岡市教育委員会／**流**：井英明ほか 2016『流遺跡3』古賀市文化財調査報告書第69集 古賀市教育委員会／**雀居**：下村智編 1995『雀居遺跡2』福岡市埋蔵文化財調査報告書第406集 福岡市教育委員会／**長島**：小田和利編 1999『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告55』福岡県教育委員会／**中伏**：山口信義編 1992『中伏遺跡1』北九州市埋蔵文化財調査報告書第120集 北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室／**中道**：伊崎俊秋編 1996『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告39』福岡県教育委員会／**七坂**：佐土原逸男・佐々木隆彦編 1985『東小田遺跡群』福岡県文化財調査報告書第70集 福岡県教育委員会／**ナライ**：丸山康晴・馬渡佳子編 1981『西平塚遺跡・ナライ遺跡』春

日市文化財調査報告書第10集 春日市教育委員会／**西新町**：池崎讓二・浜石哲也ほか 1982『高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 西新町遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第79集 福岡市教育委員会、加藤良彦編 1997『西新町遺跡6』福岡市埋蔵文化財調査報告書第505集 福岡市教育委員会／**西ノ迫**：中間研志・佐々木隆彦ほか 1993『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告25』福岡県教育委員会／**野方久保**：二宮忠司・大庭友子編 1993『野方久保遺跡Ⅱ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第348集 福岡市教育委員会／**野方中原**：柳田純孝 1974『野方中原遺跡調査概報』福岡市埋蔵文化財調査報告書第30集 福岡市教育委員会、二宮忠司編 1992『国史跡野方遺跡環境整備報告書』福岡市埋蔵文化財調査報告書第313集 福岡市教育委員会／**野田目A**：吉武学編 1997『野田目A遺跡4』福岡市埋蔵文化財調査報告書第527集 福岡市教育委員会／**杷木宮原**：小田和利編 1991『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告21』福岡県教育委員会／**八王子**：新原正典編 1987『八王子遺跡群Ⅱ』碓井町文化財調査報告書第2集 碓井町教育委員会／**八ヶ坪**：森山栄一編 1989『八ヶ坪遺跡第6・7地点』筑紫野市文化財調査報告書第22集 筑紫野市教育委員会／**馬場山**：小田富士夫編 1975『馬場山遺跡』北九州市埋蔵文化財調査会、栗林伸司編 1980『馬場山遺跡』北九州市文化財調査報告書第36集 北九州市教育文化事業団ほか、栗林伸司・宇野慎敏編 1985『馬場山遺跡第B、C、D地点』北九州市埋蔵文化財調査報告書第37集 北九州市教育文化事業団ほか／**花見**：橋口達也編 1986『花見遺跡第2地点』古賀町文化財調査報告書第2集 古賀町教育委員会／**比恵**：横山邦継編 1986『福岡市博多区 比恵遺跡 第6次調査 遺物編』福岡市教育委員会、山口譲治編 1990『比恵遺跡群9』福岡市埋蔵文化財調査報告書第227集 福岡市教育委員会、菅波正人編 1992『比恵遺跡群11』福岡市埋蔵文化財調査報告書第289集 福岡市教育委員会、杉山富雄・山崎龍雄編 1996『比恵遺跡群15』福岡市埋蔵文化財調査報告書第401集 福岡県教育委員会、下村智編 1996『比恵遺跡群20』福岡市埋蔵文化財調査報告書第451集 福岡市教育委員会、白井克也編 1996『比恵遺跡群21』福岡市埋蔵文化財調査報告書第452集 福岡市教育委員会、山崎龍雄編 1996『比恵遺跡群22』福岡市埋蔵文化財調査報告書第453集 福岡市教育委員会、長家伸編 1997『比恵遺跡群24』福岡市埋蔵文化財調査報告書第530集 福岡市教育委員会、星野恵美ほか 2007『比恵46』福岡市埋蔵文化財調査報告書第955集 福岡市教育委員会、加藤良彦 2016『比恵74』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1296集 福岡市教育委員会、清金良太 2017『比恵77』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1320集 福岡市教育委員会／**東入部**：吉武学 1994『東入部遺跡群2』福岡市埋蔵文化財調査報告書第382集 福岡市教育委員会／**東小田峯**：石橋新次 2016『東小田峯遺跡Ⅰ』筑前町文化財調査報告書第19集 筑前町教育委員会／**平塚山の上**：隈部敏明編 1996『平塚山の上遺跡Ⅰ』甘木市文化財調査報告第36集 甘木市教育委員会／**平若A**：平田定幸ほか 2011『平若A遺跡』春日市文化財調査報告書第62集 春日市教育委員会／**部木原**：福島日出海 2022『部木原遺跡』粕屋町文化財調査報告書第59集 粕屋町教育委員会／**前田**：山村信榮編 1998『大宰府・佐野地区遺跡群Ⅷ』太宰府市の文化財第39集 大宰府市教育委員会／**御笠**：奥村俊久編 1986『御笠地区遺跡』筑紫野市文化財調査報告書第15集 筑紫野市教育委員会／**三雲**：柳田康雄編 1980『三雲遺跡Ⅰ』福岡県文化財調査報告書第58集 福岡県教育委員会、柳田康雄・小池史哲編 1981『三雲遺跡Ⅱ』福岡県文化財調査報告書第60集 福岡県教育委員会、柳田康雄・小池史哲編 1982『三雲遺跡Ⅲ』福岡県埋蔵文化財調査報告書第63集 福岡県教育委員会、小池史哲編 1983『三雲遺跡Ⅳ』福岡県文化財調査報告書第65集 福岡県教育委員会／**三雲井原**：江崎靖隆ほか 2014『三雲・井原遺跡Ⅸ』糸島市文化財調査報告書第13集 糸島市教育委員会、平尾和久編 2019『三雲・井原遺跡Ⅹ』糸島市文化財調査報告書第21集 糸島市教育委員会／**御床松原**：井上裕弘編 1983『御床松原遺跡』志摩町文化財調査報告書第3集 志摩町教育委員会／**三苦永浦**：吉留秀敏編 1996『三苦永浦遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第476集 福岡市教育委員会／**宮の前**：下條信行・沢皇臣編 1971『宮の前遺跡(A～D地点)』福岡県労働者住宅生活共同組合、橋口達也ほか 1971『宮の前遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第13集 福岡市教育委員会／**姪浜**：長家伸 1996『姪浜遺跡2』福岡市埋蔵文化財調査報告書第478集 福岡市教育委員会／**門田**：井上裕弘編 1978『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告第7集』福岡県教育委員会／**矢倉**：山野洋平編 1982『矢倉遺跡』筑紫野市文化財調査報告書第8集 筑紫野市教育委員会／**脇田**：奥村俊久 1994『脇田遺跡Ⅲ』筑紫野市文化財調査報告書第43集 筑紫野市教育委員会

【唐津湾沿岸】 中原：小松讓ほか 2014『中原遺跡 9区・10区の調査と鍛冶関連遺物8』佐賀県文化財調査報告書第203集 佐賀県教育委員会

【山陰】 会下2019を参照。以下は追加分。**神後田**：三宅和子編 2021『神後田遺跡』松江市文化財調査報告書第197集 松江市／谷口恭子ほか 2001『服部墳墓群』鳥取市文化財団／**森原下ノ原**：真木大空 2022『森原下ノ原遺跡1～3地区(2. 縄文～古墳時代編)』一級河川江の川直轄河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書4 鳥根県教育委員会

【越前】 柴山崎：月輪泰ほか 2000『柴山崎遺跡2』福井県埋蔵文化財調査報告第48集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター／**林・藤島**：富山正明ほか 2009『林・藤島遺跡 泉田地区』福井県埋蔵文化財調査報告第106集 福井県教育庁埋蔵文化財調査

センター

【加賀】 岩出うわの：小嶋芳孝 1984「石川県の弥生時代から古墳時代初期の鉄製品について」『埋蔵文化財研究会第16回研究集会発表要旨関連資料集1』／**宇気塚越**：小嶋芳孝 1984「石川県の弥生時代から古墳時代初期の鉄製品について」『埋蔵文化財研究会第16回研究集会発表要旨関連資料集1』／**西念・南新保**：楠正勝 1996『金沢市西念・南新保遺跡Ⅳ』金沢市文化財紀要119 金沢市教育委員会／**塚崎**：吉岡康暢ほか 1976『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書2』石川県教育委員会ほか／**寺中B**：楠正勝 1992『金沢市寺中B遺跡Ⅲ』金沢市教育委員会／**中奥・長竹**：中村潤 2000『松任市中奥・長竹遺跡』松任市教育委員会／**額谷**：安英樹 1998『金沢市額谷遺跡』石川県立埋蔵文化財センター／**額見町西**：岩瀬由美ほか 2000『小松市額見町西遺跡』石川県埋蔵文化財センター／**美岬・千崎B**：松山和彦・林大智 1998『美岬・千崎B遺跡』石川県立埋蔵文化財センター／**八里向山**：望月精司ほか 2004『八里向山遺跡群』小松市教育委員会／**八日市地方**：中屋克彦ほか 2019『小松市 八日市地方遺跡』北陸新幹線建設事業(金沢・敦賀間)に係る埋蔵文化財発掘調査概要報告書 石川県埋蔵文化財センターほか

【能登】 上田出西山：三浦純夫 1980『上田出西山遺跡発掘調査報告書』押水教育委員会／**奥原峠**：善端直編 1998『奥原峠遺跡』七尾市教育委員会／**鹿頭上の出**：久田正弘編 1989『石川県羽咋郡富来町鹿頭上の出遺跡』富来町教育委員会／**宿東山**：北野博司編 1987『宿東山遺跡』石川県立埋蔵文化財センター／**竹生野**：越坂一也編 1988『竹生野遺跡』石川県立埋蔵文化財センター／**冬野**：西野秀和編 1988『押水町冬野遺跡群』石川県立埋蔵文化財センター

【越中】 打出：小黒智久ほか 2006『富山市打出遺跡発掘調査報告書』富山市埋蔵文化財調査報告7 富山市教育委員会

【越後】 上ノ平・矢代山：駒井和愛・吉田章一郎 1962「上ノ平・矢代山遺跡」『裴太』慶友社 pp.38-74／**裏山**：小池義人ほか 2000『裏山遺跡7』新潟県埋蔵文化財調査報告書96 新潟県教育委員会ほか／**経塚山**：金子正典 1999『内野手遺跡・経塚山遺跡』三条市文化財調査報告書10 三条市教育委員会／**下馬場**：尾崎高宏ほか 2005『下馬場遺跡・細田遺跡 上信越自動車道関係発掘調査報告書19』新潟県埋蔵文化財調査報告書152 新潟県埋蔵文化財調査事業団ほか／**近岡**：栃木英道編 1986『近岡遺跡』石川県立埋蔵文化財センター／**堂の前**：石川博行ほか編 2010『堂の前遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第213集 新潟県埋蔵文化財調査事業団ほか

【備中・備前・美作】 会下2020を参照。

図出典 (一部改変のうえ、再トレース)

図1-1 東山信治ほか 2003『北原本郷遺跡1』鳥根県教育委員会ほか 図51-423／**図1-2** 杉山一雄ほか 2003『小坂向城山城跡・ヒロダン・小坂向遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告176 岡山県教育委員会 図33-M7／**図1-3** 正岡陸夫ほか 1984『百間川原尾島遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告56 岡山県教育委員会ほか 図321-96／**図1-4** 柳田康雄・小池史哲編 1981『三雲遺跡Ⅱ』福岡県文化財調査報告書第60集 福岡県教育委員会 図67-4

島根県古代文化センター研究論集 第30集

古代出雲と吉備の交流

令和5(2023)年3月31日発行

刊 行 島根県教育委員会

編 集 島根県古代文化センター

〒690-8502 島根県松江市殿町1番地 島根県第三分庁舎
TEL 0852(22)6725 FAX 0852(22)6728

印 刷 渡部印刷株式会社

〒690-0874 島根県松江市中原町192
TEL 0852(21)6231